

金堂

金堂は現存する世界最古の木造建築であり、法隆寺の最も重要な宝物が収められている。五重塔と並んで、法隆寺の西院伽藍の中心となる建物である。

金堂はその外側にも内側にも素晴らしい装飾が施されている。天井には中央アジア西域地方の楽器を持った天人や、中国風の鳳凰が取り付けられた天蓋が吊るされ、その下には2体の脇侍を付き従えた釈迦如来像が坐っている。釈迦の像は、622年に亡くなられた聖徳太子と等身の像で止利仏師によって制作され、その翌年され、その翌年に完成している。

病から救済して下さると信仰される薬師如来の像がこの三尊像の東側に据えられている。これは、病に苦しんだ聖徳太子の父、用明天皇を弔うために設置された。同様に、西方浄土の仏陀である阿弥陀如来の像が三尊像の西側に据えられている。これは聖徳太子の母である皇后穴穂部間人を弔うために設置されたものである。

四天王像もまた、静かな金堂の中で穏やかに佇み、幸運の女神である吉祥天の木彫の立像や、戦いの神であり国家の守護神である毘沙門天像も釈迦三尊像の左右に立っている。吉祥天と毘沙門天はどちらも平安時代（794～1185年）、国の安泰や作物の豊穰を祈る行事の本尊として、この仏像群に加わった。阿弥陀如来の脇侍である勢至菩薩の像は、かつては金堂の中に安置されていたが、明治時代（1868～1912年）の頃に寺院から姿を消した。その後、フランスのギメ東洋美術館にあることがわかった。今でもその像は同館に所蔵されており、そのレプリカが安置されている。